

ピーカンキッズ ～読み聞かせの会～

今回は読み聞かせの会の活動内容について紹介します。私たちは、未就学のお子様を対象に、月に1回「読み聞かせの会」を開催しています。活動の中心となるのは、大型絵本を使った読み聞かせです。大きなページに描かれた鮮やかなイラストは子どもたちの目を引き、物語の世界へと引き込む力があります。文字がまだ読めない小さなお子様も、絵を見ながらお話の流れを楽しめるのが魅力です。さらに、しかけ絵本も活用しており、めくることで変化するイラストが子どもたちの好奇心をくすぐります。「次は何が出るの?」と目を輝かせながら、物語の展開を楽しむ姿が印象的です。

本の選び方にも工夫しており、季節ごとのイベントや自然の移り変わりにも合わせた絵本を選んでいきます。例えば、春には、ぼかぼかとした陽気の中



▲読み聞かせ

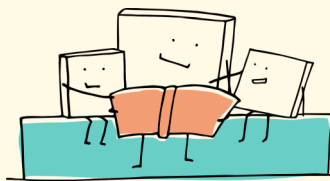
でのピクニックや花々が咲き始める様子、小さな虫たちが動き出し命が芽吹く様子を描いた絵本を取り入れています。夏には「海」や「すいか」など夏らしいテーマの本、秋には「運動会」や「どんぐり・松



▲しかけ絵本

ぼっくり」などを題材にしたお話、冬には「クリスマス」や「お正月」にまつわる絵本を選び、お子様たちが本を通じて季節を感じ、身近な出来事と結びつけながら物語を楽しめるように工夫しています。

また、この活動はお子様たちだけでなく、保護者同士の交流の場としても活用されています。読み聞かせの時間が終わった後には、保護者の方々が育児の悩みを話し合ったり、おすすめのお出かけスポットの情報を交換し合ったりする様子がよく見られます。初めて参加する方も、絵本をきっかけに自然と会話が生まれ、温かい雰囲気の中でつながりを深めています。保護者の方々にはリラックスして楽しんでいただけるよう、コーヒーとスナックを用意しております。



お子様たちの笑顔が、私たちスタッフにとって何よりの励みです。これからも、たくさんのお子様たちに絵本の楽しさを伝え、親子のふれあいの場を提供していきたいと思っています。

「読み聞かせの会」は毎月開催しております。お気軽にご参加ください。

リレー式 ヒューストン日記 第246回 みなこさん

渡米してはや30年余り、日本語の文章を執筆するのは、久しぶりである。少々おかしな文章があれば大目に見ていただきたい。もはやこれまで培ってきた私生活はラテンなみのドラマ(世に言うソープオペラ)が作れるくらい波瀾万丈であった。伝記でも出版したいものである。

しかしながら子供達も手が掛からなくなり、と言うかお金だけが掛かるようになったものの、そのかわりに自分の時間が出来るようになった事は何にも代えがたい。せつかくヒューストンにいるのだからアメリカ国内、ヨーロッパや中南米など機会があれば訪れたいと思っていた。理想では年齢の数だけ他国を、と思っていたがなかなか難しいのである。年齢がばれるので目標数は伏せておこう...子供達が高学年になってから国内の国立公園に幾つか行って来た、ユタ州のアーチーズはさることながらブライスキャニオンも良かった。ザイオン国立公園に行った際には是非ブライスにも足を運んでいただきたい。国立公園はとにかく歩く、こんなに危険な所も思うところもある。実際足場から足を滑らせて亡くなった人も居るのだとか。さすがアメリカだチャレンジ精神が並ではない、日本だと立ち入り禁止だろう。皆さんも体力があるうちに行って頂きたい。



子供達も大きくなると家族旅行より友達との時間を優先するようになりちょっと寂しくなった。なのでもっぱら同僚などとふらついている。中南米など余り興味はなかったが、行ってみると中々面白かった。夜遅くまで、町がザワザワしてるのは日本のようできうきする。ニューヨークに行くより近いお

隣のメキシコも楽しい。カンクーンなどのリゾート地だけでなく、小さな街も素敵だ。グアダハラハラやグワナフアなどもお勧めだ。プエブラも良かった、活火山があり、写真を見せた友人は富士山と勘違いするほど綺麗な形の山である。少し足を延ばして、パナマ運河を見た時は感動した。船が行きかうのを見てるのは半日いても飽きない。ゆっくりと水量調整して水門が開く様子は当時建築を請け負った日本企業に感服する。だがその向こうに中国会社が建設した第2の運河を後目に見ていた事は言うまでもない。ワインがお好きな方にはチリやアルゼンチンもお勧めしたい。行きたいリストに入っているのはボリビアのウユニ塩湖とチリのイースター島、エクアドルのガラパゴス諸島だが遠いので腰があがらない。調べてみるとなんとユタ州のボンネビルにある塩湖も中々だという。モアイ像は宮崎県のサンメッセ日南のレプリカ、ガラパゴスの動物たちはヒューストンの動物園ですませよう。

自由にホイホイと行けるのを満喫していたのだが、2年前から四つ足の家族ができた。たまたま同僚と話をしていたら、子犬の引き取り先を探しているという。写真を見せられた瞬間、”一目会ったその日から”見事に落とされた。家を空けることが多いのでなるべくペットを飼うのを控えていたのだが何かの運命を感じてしまった。という事で、我が家に迎え入れたのである。四つ足のおかげで海外旅行どころか外出さえ後ろめたくなった。私は休日ソファから離れることがなかった、いわゆるカウチポテト状態だったが御犬様が住むようになってバッファローバイユウパークのドックパークまでの散歩が日課になってしまった。中年女性が全身ユニクロづくめで犬の散歩をしていればそれは私です。お気軽にお声をお掛けください。それはさておき、せつかく自己中の生活を楽しんでいたが、御犬様中心の生活になってしまった今日この頃、だがそれが苦ではない。携帯の待ち受けの写真を子供達から御犬様に変えたことは子供達にショックを与えたようだ。

